

にぎわい祝!第100号

日本海にぎわい・交流海道ネットワーク通信

編集担当者より

平成9年12月の創刊から早9年の歳月が経ち、「にぎわい通信」はこのたび第100号を迎えました。北海道は第3号から担当し、今回で18回目の発行となります。

記念すべき第100号では、「にぎわい通信第3号」で最初に取り上げられた稚内市のほか、礼文町、利尻町、利尻富士町の日本最北に位置する4市町の概要を紹介し、後半では各会員様からいただいた最近の話題についてご報告いたします。



離島の生活を支えるフェリー“利礼航路”

稚内市は、日本最北端に位置し、宗谷海峡をへだて僅か43km先にはロシア連邦サハリン州を望むことができる観光都市です。また、稚内港には北海道遺産の歴史的建造物「北防波堤ドーム」があり、かつて稚内と樺太(現サハリン州)を結ぶ連絡船の発着駅として利用されていました。今でも街のシンボリック建造物として、全国の観光客や稚内市民に親しまれており、北防波堤ドームでは各種イベントが多数開催されています。

利尻島や礼文島への往来には、主にフェリーやRORO船が利用されており、この航路は利尻島の「利」と礼文町の「礼」の頭文字として「利礼(りれい)航路」と呼ばれています。「利礼航路」は、稚内市への買い物や通学などの移動手段として必要不可欠な航路となっており、観光客の多い夏季はもとより、風浪が厳しくなる冬季においても、人や物の流れは途絶えることなく、島に住む人たちの生活を支えています。



稚内港 北防波堤ドーム



稚内-利尻-礼文を結ぶRORO船

日本最北の島 礼文島

礼文町のある礼文島は、赤道と北極点のほぼ中間に位置する「北極星直下の島」として謳われている日本最北端の島です。また、「花の島」としても知られており、本州では標高2,000メートル級の高山でしか見られないレブンアツモリソウなど、礼文島固有種をはじめとする約300種もの高山植物が、春から夏の終わりにかけて海拔ゼロメートルで咲いています。

最近では、地元小学生を対象に「ポートウォッチング」等を積極的に実施し、小型作業船等による港内見学やアワビの稚貝放流体験などを通して、若い世代に港をより知ってもらう活動にも力を入れています。



『花まつり』でにぎわう香深港イベント広場

大型旅客船も寄港 利尻島

利尻町と利尻富士町のある利尻島は、島のシンボルで日本名山百選にも選ばれている利尻富士を有し、利尻・礼文・サロベツ国立公園に指定されるなど、観光地として広く知られています。

利尻町は、春から夏にかけては、数多くの高山植物が咲き、リシリコマドリをはじめ多くの野鳥がさえずる自然の宝庫です。また、全国的に有名となった「利尻昆布」や「ウニ」など、日本海の海の幸にも恵まれた漁業と観光に力を入れている町で、近年はクルーズ船も寄港するようになりました。今後も「ぱしふいっくびいなす」や「にっぽん丸」などの大型客船の寄港が予定されており、多くの観光客が利尻島に足を運び、雄大な自然を満喫することでしょう。

利尻富士町は、島の東側を占める利尻富士の裾野に位置する町で、毎年約25万人もの観光客が訪れています。特に夏場の観光シーズンは観光客でにぎわいを見せ、出迎える観光バスが港内に整列する光景はこの時期ならではのものとなっています。



利尻島へ向かう「にっぽん丸」



観光客と出迎える観光バスでにぎわう鷺泊港

会員だより

稚内市 愛車の晴れ舞台!! 名車が大集合!!

ノーザンロード・クラシックカー・フェスティバル 2006を開催!!

日本最北の港「稚内港」の象徴「北海道遺産“北防波堤ドーム”」が建設されてから今年で満70周年、中世ヨーロッパ建築を彷彿させる構造物の円柱が70本あることにちなみ、今年度は「北防波堤ドーム70周年記念事業」を展開中です。

7月7日から7月9日までの3日間、この「記念事業」の冠をつけ「ノーザンロード・クラシックカー・フェスティバル」が、歴史的な構造物を舞台に今年初めて開催されました。

「利尻・礼文・サロベツ国立公園」と切っても切れない関係にある稚内港、日本海オロロンラインと利尻・礼文フェリー航路が結ぶ地で開催を企画したのは「NPO法人ノーザンロードカーイベント倶楽部」、カーイベントでの“まちづくり活動”を通じて児童・母子福祉の向上や青少年健全育成事業を支援しています。

開催内容は、7日の前夜祭に始まり、GTカー展示・パネル展、GTカー特別走行会・サイン会、ちびっ子ビンゴ大会、豪華プレゼント抽選会、最北屋台村等々で、珍しいイベントとあって初日から大勢の見物客で賑わっていました。

出展は道内や本州各地から名車自慢が参加、管内のクラシックカー愛好者も自慢の愛車を披露、見物に来ていた市民愛好家の“素晴らしい”の言葉に胸を張っていました。また、特別協賛の有エムエムビー・チーム・エプロからは実物のレーシングカーやラリーカーなども展示され、見物客の目を楽しませていました。

その他の冠事業として9月16～27日に「北防波堤グルメまつり」が開催されました。引き続き“北海道遺産について学ぶ「稚内塾」や「フォト・コンテスト」、「記念セミナー」、冬の港まちをスノーキャンドルで彩る「彩北わっキャナイト」が開催される予定になっていますので、是非お立ち寄り下さい。



70周年記念事業のロゴマーク



「ノーザンロード・クラシックカー・フェスティバル」の様子



北防波堤ドームの中に並ぶクラシックカー



にぎわいをみせた「北防波堤グルメ祭り」

礼文町

水産まつり うめ～べやフェスティバル開催!!

礼文島では、これまで観光シーズンの7月に大きなイベントが無かったことから、礼文町水産加工協議会が主体となって、平成10年から「水産まつり」と題し“うめ～べやフェスティバル”を開催しています。

今年で8回目を迎えたうめ～べやフェスティバルは、香深港の一般駐車場を開催会場として、お魚大好きコーナー、味三昧コーナー、試食コーナー、即売コーナーの4コーナーを設け、礼文島でとれた海の幸を提供しています。

「お魚大好きコーナー」は無料で、ウニ剥き体験や活タコ・カレイのつかみ取りができて、大盛況です。また、試食コーナーでも礼文島産の開きホッケを無料で提供しています。

また、「味三昧コーナー」と「即売コーナー」では格安で焼きウニやイカ焼き、その他特産品の販売も行っており、島民や島を訪れる観光客からは大変好評となっています。

毎年7月中旬（海の日となる20日前後）の午前11時から午後3時の時間帯で開催していますので、海の幸を満喫できる礼文町へ、是非お越しください。



人気イベント「活タコのつかみ取りの様子」



海の幸が無料で楽しめる「お魚大好きコーナー」

利尻町

クルーズ船「ふじ丸」が入港

沓形港耐震強化岸壁で歓迎セレモニーを開催

沓形港は北海道の北西、稚内市ノシャップ岬より、海路52km隔てた利尻島の北西海岸に位置する地方港湾です。

本道と隔絶している離島であるため、古くより、すべてが海上交通に依存しており、本港は、物流、産業、生活、交流等諸活動を支える拠点港として、さらに近年では大型クルーズ客船が寄港するなど本港は重要な役割を担い、地域の産業・経済の発展と住民生活の向上に大きく寄与しています。

本港は、近年各地で発生している「地



沓形港の耐震岸壁に接岸するクルーズ船「ふじ丸」

震」の防災対策として、平成15年度より耐震強化岸壁の整備を進め、本年6月から大型船の接岸が可能となりました。記念すべき入港第1船となる大型豪華客船が6月3日寄港、入港記念とあわせて歓迎セレモニーが関係者をはじめ、乗員乗客約400人が見守るなか盛大に行われました。

整備された同岸壁に初めて接岸したのは、日本を代表する大型客船「ふじ丸」(日本チャータークルーズ(株)・23,340総ト)で、海鳴り太鼓で幕開けしたセレモニーでは、利尻町、観光協会、北海道開発局等関係者によるテープカットが行われました。この後、ふじ丸の船長と乗船客の代表へ花束と利尻島名産品がそれぞれ贈られたほか、ふじ丸から利尻町へ記念品が贈呈されました。



初接岸を記念したテープカット

この日は初接岸にふさわしく天候にも恵まれ、下船した乗船客280人は早速バスに分乗して島内観光に出発、一行は初夏の利尻島を満喫しました。また、接岸する大型客船を一目見ようと朝早くから大勢の島民や観光客が訪れ、入港、接岸作業を食い入るように見つめては、間近で見るその巨大さに終始圧倒されていました。

本港の耐震強化岸壁は利尻島の防災、災害復旧の拠点港として平成15年度から整備し、本年6月に一部が完成、暫定的に供用を開始し、約30,000総トクラスの大型客船の接岸が可能となりました。これまでは、こうした大型客船は沖合に停泊しテンドーポートにより乗船客が上陸していたため、天候等の理由から上陸をたびたび断念することもありましたが、本年6月からは、直接接岸が可能となり、上陸を楽しみにしている乗船客の期待に応えることができるようになりました。



耐震強化岸壁に下船する乗船客

このあと、今シーズンは「ぱしふいっくびいなす」(28,518総ト)、「にっぽん丸」(21,903総ト)が入港、接岸する予定となっており、利尻・礼文観光の新たな幕開けに大きな期待が寄せられています。

利尻富士町

写真展「鴛泊みなとのうつりかわり」を開催

鴛泊港は、古くは大正9年に稚内築港工事のための石材積み出し施設として築設されて以来、昭和7年船入潤工事の着手、昭和27年地方港湾の指定後、国直轄事業として整備が進められ、現在では利尻島の玄関口として3,500総ト級フェリーが就航し、離島住民の生活や福祉、観光、地域経済、物資流通の拠点となっています。

その間、練漁の衰退や、カーフェリーの就航、国立公園指定による観光客の増加、ターミナルや燃料備蓄タンクの完成など、港湾整備の過程は当町の歩みそのものであり、その時々地域の切望と時代の要請を反映してきた鴛泊港は、その時代の変遷にともない、その役割を一層高め、その姿を変えてきました。

そこで、観光客や島民に対して、鴛泊港から見る時代の変遷を分かり易く知ってもらうため、写真展「鴛泊みなどのうつりかわり」を鴛泊港フェリーターミナル内で開催しました。

昔の鴛泊港の風景等に懐かしそうに見入る方や、興味深そうに眺める方、石材の積出しで消えたペシ岬の西側の小山（モペシ）の写真などに観光客のみならず帰省客や町民など大盛の方が訪れ、フェリーターミナルは、にぎわいをみせていました。



明治期の鴛泊
(写真左の小山が石材積出しにより消えたモペシ)



大正末期～昭和初期の鴛泊港



昭和40年代灯台山から見た鴛泊港



写真展の様子

編集者の独り言

会員様からのご協力、ご理解のお陰で、今回めでたく通巻100号を編集することができました。

この節目以降も、引き続き「にぎわい通信」を発行していくにあたり、今一度、「にぎわい通信」のありかたについて議論し、充実した誌面づくりに努めてまいりたいと思います。

編集・問い合わせ先

日本海にぎわい・交流海道ネットワーク 事務局
国土交通省 北海道開発局 港湾空港部 港湾計画課 調査係 加藤
Tel : 011-709-2311 (内線5617)
Fax : 011-709-2147
E-Mail : katou-t22am@hkd.mlit.go.jp